

釋放したによるといふのであつたが、老臣にして此くの如き重刑に處せられたのは、前代未だ曾てその例を見ぬから、上下目を瘳てたといふ。蓋し前山重政監國政治の第一工作であつたらう。隆振寛政二年三月廿八日宥され、三年三月晦日五十八歳を以て歿した。法號隆振院不二道肝居士、野田山に葬られた。子伊助(後左京實直)天明五年十二月祖父内膳成象の遺跡六千石を襲いでその祀を維持した。

オクムラタダヨリ 奥村忠順 通稱助六郎。眞享三年父又十郎の後を襲いで千七百石を領し、享保十四年御算用場奉行に任じ、寛延三年七十四歳を以て歿した。忠順字は履信。一字は伯亮、盈進又は竹溪と號し、學を好みて室門七才の一に數へられたが、詩賦は未だ佳なるものを見ぬ。和歌に至つては甚だ之を善くした。

オクムラタロザエモン 奥村太郎左衛門 前出利常に仕へ、二百五十石を受け、萬治元年歿。子孫相繼いで藩に仕へた。

オクムラテルシゲ 奥村榮滋 加賀藩の老臣奥村氏宗家の第十四代。榮通の嫡男。嘉永六年九月七日出生。通稱義十郎。明治二年五月廿七日父の退老によつて知行一萬七千石(内千五百石與力知)を襲いだが、後廢藩に會ひ、三十三年特に華族に列し、男爵を授けられ、從五位に叙し、次いで金澤市長、尾山神社宮司に任じ、大正十年累進正四位となり、十二年三月十七日七十一歳を以て歿。法號寂靜院本覺榮滋居士、野田山に葬られた。

オクムラテルチカ 奥村榮親 加賀藩の老臣奥村氏宗家の第十二代。榮實の嫡男。文政八年十一月十三日出生。幼名元弘。幼名九郎、

後助十郎。天保十四年九月朔日遺知一萬七千石(内千五百石與力知)を嗣ぎ、弘化元年九月五日歿。享年二十。法號心光院齋齋自性居士。野田山に葬られた。

オクムラテルトモ 奥村照知 通稱貞吉。瀨兵衛。父は長左衛門長照。初め大小將組に班し、寶曆八年大小將横目より漸く昇進して御馬廻頭に至り、天明五年役儀を指除き閉門を命ぜられ、六年十月御免、寛政六年二月朔七十五歳を以て歿した。

オクムラテルミチ 奥村榮通 加賀藩の老臣奥村氏宗家の第十三代。實は支家奥村左京實直の八男。文化九年七月二十日出生。幼名小興之助、後織人。助右衛門。初諱從之。美稱。弘化元年十一月二日榮親の末期養子として遺知一萬七千石(内千五百石與力知)を繼ぎ、安政三年十二月十六日從五位下河内守に叙任し、後文久二年十月廿一日伊豫守と改めた。元治元年前出慶寧上洛の際之に供奉し、七月十九日の變亂に兵を率ゐて仙洞御所を衛り、率先盡力御感斜ならざるを以て後に白布を賞賜せられ、明治元年十月十二日河内守に復し、十二月執政に任じ、二年五月退老して竹麻呂と稱し、十年三月三十日六十六歳を以て歿。野田山に葬り、桂昌院榮通竹翁居士と諡せられた。

オクムラトキナリ 奥村時成 加賀藩の老臣奥村氏宗家の第五代。榮清の嫡男。正保元年金澤に出生。母は前出知好の女。幼名虎松、後内匠。伊豫。初諱榮尙。萬治三年十一月廿一日新知千石を賜ひ、寛文九年十二月十六日更に千石を増し、十一年十二月廿九日父榮清の

二千石の中千五百石を割いて弟多門榮貞に與へ、五百石は之を收公せられた。延寶七年十二月廿一日又一千石を加増せられ、合計一萬四千五百石(内千石與力知)となり、元祿五年十二月廿日四十九歳を以て歿。法號淨光院含空良照居士。野田山に葬られた。

オクムラナガアキラ 奥村榮明 加賀藩の老臣奥村氏宗家の第二代。永福の嫡男。永祿十一年尾張荒子に生まる。通稱助十郎。織部。天正十二年榮明十七歳で末森を守り、佐々成政の軍を撃退し、十八年關東の役に從ひ、慶長元年從五位下河内守に叙任せられ、同年父永福の致仕によつて祿六千六百五十石を讓られ、先に領する二千石を併せ、又別に利家から二千石を興へられた。五年淺井曜の役に功があり、戦後二千石を加賜せられ、又大坂兩役に從うて、元和元年千石を賞せられ、是に至りて祿總計一萬三千六百五十石となつた。榮明最も射技に精しく、元和元年光高の生誕するに當り、命を受けて鳴鼓羅目の技を行ひ、爾後累世佳例となる。六年五月二十日卒する時享年五十三。法號清雲院葉山久奕居士、野田山に葬られた。

オクムラナガキヨ 奥村榮清 加賀藩の老臣奥村氏宗家の第四代。榮政の嫡男。慶長十九年金澤に生まる。通稱立齋。河内。伊豫。元和元年前出利常祿一千石を賜ひ、承應元年父の歿後世祿一萬三千石(内一千石與力知)を受け、その餘の六百五十石を弟榮張に加賜して、合計二千六百六十石(内千石與力知)となし、別に千石を弟榮相に與へられた。寛文十一年十月十八日享年五十八で歿。法號永清院心隆昌傳居士。野田山に葬られた。

オクムラナガテル 奥村長照 通稱小五郎。源次郎。長左衛門。正徳二年父瀨兵衛邦長の遺知六百石を受けた。享保三年十二月三日夜江戸本郷三丁目の火災の節、長左衛門は加賀藩の一番火消として出役し、仙石兵庫の火消と衝突して大喧嘩をなした。次いで九年大小將横目、十二年御先簡頭に任じ、十三年七月十五日五十一歳を以て歿した。

オクムラナガトミ 奥村永福 加賀藩の老臣奥村氏の家祖。姓は平。その先賢前に在つて瀨留氏を稱し、後尾張の奥村を領して奥村氏に改めた。天文十年尾張清洲に生まる。通稱助十郎。助右衛門。初諱家福。永福初め前出利春及びその子利久に仕へたが、永祿十二年織田信長の命によつて、利久の弟利家がその統を襲ぐに及び、直に祿を辭して流浪した。時に年廿九。後天正元年朝倉義景討伐の際私に前出利家の軍に加つて遂に之に仕へ、三年五月長篠の役に從ひ、九月越前府中に移り、百石を受け、後漸く封を増し、十年七尾に在りて石動山攻撃に從ひ、十一年四月利家の金澤に轉ずるに及び、五月末森の守將を命ぜられ、十二年九月佐々成政の攻圍を受けたが之を撃退し、功によつて感狀及び利家着用の甲冑。太刀に馬印を添へて賜はつた。十五年四月永福利長に筑紫陣に從うて出征し、豊前巖石城の攻撃に創を受け、十八年亦關東の役に從ひ、文祿四年三月廿七日從五位下伊豫守に任ぜられ、家祿累計一萬九千五百石を受けたが、慶長四年致仕し、自ら三千石を隱居料とし、剃髮して快心と號した。次いで十九年大坂の役の起つた時金澤城代を勤め、寛永元年六月十二日八十四歳を以て卒。法號永福院快

八年十一月十三日出生。幼名元弘。幼名九郎、